遺老物語

島原始末記

一 於肥前国嶋原吉利支丹一揆初發之事
一 深江村働之事
一 肥前国天草吉利支丹蜂起事
　附 大矢野大庄屋搦捕之事
一 天草江唐津より加勢之事
一 富岡籠城之事
一 嶋原之内於有家村松谷松倉衆江一揆被追立事
一 板倉内膳石谷十蔵嶋原表江被遣事
一 極月十日城攻之事 并 上使衆より掟之事
一 元日城攻并板倉内膳討死之事
　附 石谷十蔵手負之事

一 為御代官松平伊豆守島原江九州下向之事
　附隣国より人数出る事
一 原之城籠固之事
　附寄衆陣所之事
一 二月廿一日一揆夜討之事

一 於肥前国島原吉利支丹蜂起之事
一 九州肥前国高来郡島原の城主松倉長門守勝家か領
六万石 其比年四拾歳 子息右近年拾七歳父子ともに
江戸在府也
頃ハ寛永十四年丁丑八月の比より右の領分の中にハ
百姓ハ世のまじハりを致由島原よりも風説専に有けり
然れバそのころハ吉利支丹の法に世の中一変して
諸人ことごとく志らん宗門になりにけり
然る所に十月廿九日の比ハ江の津村にて百姓とも百人
計寄集り彼宗門の事を行ひける折から代官山田
小右衛門息右馬介父子とも其比江の津に有ける
吟味所に出かし有る様子と聞付急き立帰り

抑西人ハ吉江もしく南呂代官は村田作左衛門殿ハ此
通りの儀は申旨急ぎ返し様にして極刑と為し人々
其後ハ作左衛門ハ我禁廷より村々家跡を仕り其上源江村は
代官南左衛門相良合右衛門に談合し仕置申し返事なれ
より西人浄家は堪へ十月廿日御所より名跡家を申しは
申し談せ為仕置御代官も村々へ申されば十月廿日
家老より家中へ御申しハ兎角く吉利支丹宗門は其上
しお旨證として亦国人数ありしを萬々と定め
一々えしと申し候申されは柳氏監鶴と為ら大矢野村松
左衛門千束善右衛門大江源右衛門森宗意　新山吉左衛門は
人数されども左ハ小西摂津守家人なり摂津守役後
後天草郡大矢野千束氏浦に居住しけるが近頃人も

紅毛に有る本郡源江村に去る年あり附近郷の武
を集て其の上慶長甲寅の年天草上津浦一人の
者ありき兎角く禁法に付異国へ追放其時書
遺して一紙の書を残し其書にいはく向年より五々
年を経て日域に宗頭一人出生すべし東西雲焼
し枯木に不時の花咲ハ野山にくるすと立江海野山に白
旗を靡かせあびゆそていうすと尊附置て一人とは氏
也と鎧に事称んに是を名り来雲雪焼きと彩
しかれは大江の庭は桜を見よ好む是なりけり
天草甚兵衛が子は四郎といふて今称ん十六歳にて謀学
と源通し宗門の奥義を究め密せ人に識らるていふうす
は恵と今ハ来もり各一黨に随ひせしもすまし識に古へ

楠成か天王寺にて未来記の謀書に不異さてまた天草
にしふ又宗門の繪像と隠し置きいかにも化して表具にふさぎし
度と此内形をとゆへども世を悼て從ふ日と送りぬ
かゝる宗像一向の身は何共の表具仕るん彼共か閨中
よみけて置きし化たる見んて驚くそのことも商家なれ
近隣の日宗方の武士しと告る諸人尊むるの思ひとる
し急作兵衛か宅に郡集と成次第の代官式内ときて自
作兵衛か宿に人びて見られハ老若の男女集り件の宗
像と拝しとふへことを次代官急破宗像と
押入れて家ゝに破り捨られより又告る
好国大名の村より三好角内孫作国とひ又人に立きは
棟梁とつるよしとぞ其後搦捕り召もの宿へ遣し

成敗也同類一宗は若とも少様露顕のうへハ家々身
は出大きと何ゆ代官の急度の宅へ押寄兵衛を
討殺しは御近所の一揆蜂起発り江戸の時の代官ゐ
檣武左衛門ふとと百姓とことと押寄て討殺されよ
又島村は代官林兵衛とと百姓とも殺されし有之
其頃六ツ時ふ嶋原城本へ松平右衛門殿より家老とも
驚き事に繰合せし岡本新兵衛
東より其武士ニ三百人 急ぎすもつて船に乗島は
沐へ教其時ふに押出し陸と見えハとしかどもそれ
家の宗方にて寄せしたまふへ大と付ケ梅立有之漆ハ
後は少大濱ぎは蜂起見へ召す新兵衛
思しかはとく寄形船は侍中を残す呼入何とも

に手入とりける歳八十計なる老人来りしと先
近隣の安徳村へまかり夕暮には帰ると住るとたつね
まゐりけるに式村の老者ハ湯味して申由申けるあいた
又先の源氏相へゆき候由を咄し候申けれは
もありけるといへは新左衛門か銭弐百文持を一つ
遣へ也と申せ又そのれも文使に参りけり弁ニ
へりれども是非のなる何人の也をたつねる也 五兵
申といひけるにいそき走帰り大息をつき参りし
るに其後も我ゝともあやうきめにあひ申候と申けり

源氏村働の事

一 去る十月廿六日早朝城内の武者あまたへ出あつまり
新左衛門ハ出陣候て鉄炮打出し候へたてあらそひ

申上八幡大菩薩と照覧有之候恩賞に可預かと
依怙有ましく候ハ御味方の功を賞へられ候へは
出陣候て敵の方へ鉄炮打出し又敵陣ニ御目付にまかり出
御目の前にて軍功を尽し鉄炮打放し申候ハゝ
申候て老人まで出候て申ます 何故まて人数
と二つに押わけ出しよハ先の御方にて相へ出し
城とまかり出候へと御申付けるに一人ともむくにあらす
二つにわかりける又新左衛門も大将して足軽
に六人与頭ともに申もの四十郎新左衛門三百余
打出源氏なれハ二手に向山の谷ニ新左衛門
申ハ出かれた見まのりけるに 一揆兵申立て
あまた足軽一面に押寄せ申候 一人

諸西は浦ノ目并豊後の府内ニ居住ある牧野伊蔵妹
丹波守へ大加賀守ある人より申通しけれハいよいよ上意
と通し又利守進ミ自是属国中きんしは在家をゆるし
かせいと努すこともなしすとりミ右の内一揆ハいよいよ一味
有て猛きいよいよ忽地浦原ハ籠城せらしして
侍とも妻子とも本丸へ入用心す浦ニ城内は下りし大方
地下は先ニある故自然内輪よりいかしなる悪逆ヶ
出来ぬべきと存候と存じ候合ひて後ちこころえ
下人は少本丸へ使ミ越されしと調来しま人使ミ越しと
城中より其外擒捕り百四十余人成敗しけるあいて
あらし城内にて人ミ頼り侍ひぶりニ六十人ありし給
も城堅固ニ相抱御申候一揆とも不叶されよう

温泉ニ入退治致ざるハ先天草へ寄合して志かくこそし
小早船を仕立天草は吉利支丹とも弐由申越
し心得ありとて邑々宗門はこのともかりあつめ其せい八
千余と記し

肥後の天草吉利支丹蜂起せるに附大矢野村大庄
屋擒捕こと

一 肥後の天草の領四万石寺澤兵庫頭忠高領分なり
彼の天草は百姓ニ甚も多むといふ若あり弐若吉利
丹宗門は奥儀をきはめ深く講國と鄒細し宗門をきはめ近年
肥後の郡ニ益宅次まゝ子ニ出でといふて生年拾
六歳の童ありし彼者弘めしをも諸儒草人ニ越へ
諸術を学び諸民をまねきし不姿のまゝ沙汰

有馬ハ松倉が政あしきニ父子共ニ不服有りて天草へ
越し宗徒ともしめし合せ相知らる然ニ嶋原ハ一揆も方より
四郎使を立て此近ニ云ふ代官を付殺し宗門
一揆は徒党を企て自今以後宗門ハ日本ニ敵せん何百万の人数
有由ト城をハ四郎此由を聞あしく思ふ甚多き人数
と見えし宗門の誓紙を取ヲ持来ル天草より此
宗門ニ一味し五千余ニて大矢野色浦ニ四郎立てと
返す百余人嶋原村ニて人数ハ千余悪誓紙送判
と調四郎か手へ渡しけれハ嶋原へ立籠城の決定
とさてとし嶋原ハ内大江といふ古城ニ籠る城を天草
とある者の百姓伊嶋ともに人をも少なく有り人数十八
村より此所ニ打寄人数ハ男女とも一万六千余

と二手ニわけ毛木峠日見峠ニ人数を差置長崎
へ使を立て同宗ニ一味せしハ押寄可放火申すと
と請合住居る者此旨ニ彼伊嶋とハ請合嶋と
名付る古城ニ又天草ハ大庄屋ともいふ者ニ
高来郡寺ニ見ニ一味セ寺ニ叔父知り此者是ハ一味して
一揆の企を不決依て四郎が叔母父兄弟も宗出頭ニ
出して引城せんと取て所々細川越中守天草村
嶋内の郡ニ内甲佐浦とハ不帰ニ上り取ニ所ニ
嶋原ハ一揆落す先達ニ肥後へ守て[illegible]より
浦へも人とさて思ひけれハ四郎ニ
兄弟もともニ捌捕兼光ね故ニ四郎ハ
天草へ唐津より加勢

一 天草富岡は城ニハ三宅藤兵衛 城代 関白様 三千石羽田右衛門子之 中將とた
兵衛 三百石足軽二十人 古橋庄助 番頭 三百石足軽二十人 其外有之 栖本村ニハ石橋
左衛門 五百石足軽二十人 常之代官とも 天草ニ有之郷ハ百姓共ニ
吉利支丹宗門一揆発り天草は百姓共も一味仕
より三宅藤兵衛出向し大キニ難儀候所ニ一揆共余ル
城ニとりて候ふ天草まてかこまれ候ハ堅く
なりもいさゝし小兄とゆるつかふさし置て悪かる
されハ大矢野より上津浦ニ討出候所ニ敵つよく
多勢ニ而かくるほとなく退治せんとて手勢
百騎人ニ而此侍又其外の小者共出し歩卒
はしのとも 相者七其ハ三百余人ニて引ニ
不及 挺を持鉄砲を可打んとてけるところに地侍

ともにハ浅見之なれとも一揆大勢ニて既ニ上津
浦近より大矢野ニ来り候ニ柳かは瀬戸ニ至れ
まてとらし 吉利支丹ニ一味致し候て見候
残れとも 其者自然一揆ニ討候てもいらん及ひて城
も取られんとなれハ三宅并弟子共とも挑とも候處
知らす 終ニ者ニ而成行候由申候
ニ付三宅藤兵衛ハ先ニ是と郷めんと近郷
の百姓の妻子を人質ニ取て露自神方唐津へ注
進せしかれハ 然れとも我をしと競ひ平の忠ある
百姓ニまかれハ家中も談合し 乱ニ及ひし 富
岡城へ加勢ニ参るる唐津者ニハ 岡の左衛門 三千石
富岡 [illegible] 右衛門 二千石 并河九左衛門 林又右衛門 此両人ハ足軽ニ而 武者 [illegible]

たゞちに從ふ
柳川ゟ五百人 有馬ゟ五百人 関ゟ五百人 濱戸
ゟ五百人 五島ゟ五百人 小笠原ゟ五百人 宗田ゟ三千餘
三百五十人 濱田ゟ四百五十人 大名是總大將ハ從二千人ゟ足輕
百六拾人は寛永十四丁丑霜月唐津を出船し 拾八里の
海上を漕渡り同七日に着岸し 雜兵あまた百斗 富岡の
城を請取 吉利支丹一揆は上津浦近邊に數多集り居
けるよしを聞しかば八日富岡より出向ひて本戸と申所へ
人數を出し陣を取天草の本戸濱寺邊ハ本より宗門
一揆の者共にて人々は計策なく定て唐津より勢向ふ
事もあらば此所一大事の耶蘇之吉利支丹に一味せし輩
にもえなし 唐津勢に合戦に及ばんと見て此方の

上津浦へ注進申ければ 唐津勢押懸申けれバ
面々のまに大きに裏切せまじく得道して自然又武
略謀もあるべきやと本戸濱寺の者共
は人質をとり上津浦へ取置けるが 唐津勢ども是を
夢にも知らずして皆武者に陣をとり不知者をよび出し
て其様子を問ければ此間本渡邊の者ども
濱寺等本へ使を越一味可仕由申ければ押寄せ討殺申
ともし候へども此者共ハ取合も無之旅のもの
義理之ハ後更在様ニ罷し不仰此働をなす
ましとなく候かと悪称の徒に此之はいゑ被申に
同心て候はんと悪しく返事致して彼を追返し申ける
閑に奉行ハ此の旨を伝へんと存し彼上津浦の者

もし討もらさば誠まんと表なり先手用意の時をうかゞひ
只今中途迄引て又中は然れども甚後へはいにとめよとや
終に当らんと討もらさば誠申すには内唐津勢
急度申は敗軍んとなりかゝりに終く人は従達一陣を
以て彼方よりの力となる三津浦の奴原はいよいよ其
をむしてなりとさあらば思敵に而もうり申これは
各此其方とすべし三宅友太郎但は侍共に藤河
九郎林又太郎同じく中浦与太郎足軽共に古橋新兵衛
足軽共に国林清太郎足軽共に大勝伊太郎ら都合
二百余人鉄炮三千挺にて乗払ひ九方小浦より赤坂に至る此
所は南は山にて北は海東西は山道にて一騎打なる悪所之小浦
より上津浦一里部戸より小浦へは四里此内に一里隔り

は遠干潟あり潮は満干の時を窺ひければ敵むかふて
いふも備へに味方と合す海辺に探をなし陣地は栖本
村は右京を本とし子息左京を伴ひて本戸
は侍を入置き城よりは一揆守より切支丹宗門に志深かりし
ものは通りて其置所を兵共にて押寄討殺す由申しは
左に一揆ともの先陣後に兵共本戸のゝ侍者とも二人
数とるけさせ本戸衆へ取かゝり時押寄せ其節と覚
ゆる栖本方の侍共と共に何も後へ引きされは又其
本其外小勢にて取るに当りけるに向本
戸へつかみ申されぬ由申されは左は左なき方は栖本
を打捨本戸へは来らずましきよし付栖本方は従足軽
加勢として文鬼は此方へも前方加勢を遣し只へ

の兵を城中へ放火して焼払ひ足軽大将十人余迄
に足軽二十人にて籠り霜月十二日松谷へ引て働とよりて死
なに及んと城中に取籠りし三會村の後山にこもり一揆
ども旗を立籠りけれしかど少も不構并て又鳥りとた
のもしみして兵を放火けれども敵一向に不構并に
あらぬをしかへ味方油断してありけれども三會ひら
入押入乱妨しても弥を詰足流し山に兵籠すとばかり
と不動様へおもり味は中より人数を下し三會おも
立所へ鬨をあげて打入　松倉は陣所へ懸らるべし
に足軽をもこらへ　勝軍して生残りし侍ども被押
立城きもすれ逃けり　何ら悪しくずれのみ
あて見ぐるしき有様やあしかる大将入江と云ふ高畠

比ら文高橋済次兵衛を取放て此外討死仕候
一　抱荒虫湯原は一揆遂はて済々いよう剣天草は土民
とつへ為りて遠は城にてこもるとも今又は同不以は
領の成に籠をもりみ甚兵衛へ武州江戸へ立て領を柳は
をも換ひこへし立兵をとて為後板倉内膳正重昌は国
付こ石谷十蔵両人を差て霜月十日江戸を立極月四日に
松倉居城湯原へ下着あり諸西は御目付豊後府内に
在住ある牧野傳蔵林丹波守又長崎奉行馬場三郎
左衛門を元集り被談義江戸まで吹されいそつか二三千
みにすぎましき由兵を集られ不よろしく闘とはけ
はゞ二万に余るとぞその内々あるゆしるの城あり

依て隣国の人数を引率日出の事なれハ鍋嶋せいよりも
筑後有馬立花ある故軍勢を急き嶋原へ出陣可
有との役を云立細川越中守忠利の人数ハ天草へ
一向まかりの役なり然ハ龍造寺の城を鍋嶋信濃守ハ
江戸に在れハ其代として嫡子紀伊守元茂二男甲斐守直澄一
百余騎を卒し然ある筑後久留米の城主有馬玄蕃
頭豊氏も在江戸なれハ子息右京大輔忠郷ハ在所日出柳
川の城主立花飛騨守宗茂も在江戸にて嫡子左近忠重
并予余にて出陣なる細川越中守忠利父子とも在江戸ゆ
付家臣長岡佐渡有吉頼母両人を大将にてあまくさ
表へ出陣なさしむ紀伊守光利ハ若年にてましめより
在江戸にて其上十八日御暇給りいそき紀伊守へ

馳下り一万余にて十二月六日天草表へ出陣せしむ細川
前後の軍勢并寺沢兵庫守天草中を検責ある一揆
共由を聞へ皆小船にのり嶋原へ渡り故天草ニハ一揆一人
も不残紀伊守ハ天草にて寺沢人数に川渡し出陣
原嶋原へ向かふ勢を勧まいらし天草ヘハ御目付牧野
伝蔵并丹波守松平甚三郎と嶋原へ城の板倉右衛門と示し
ありけり依合せいのひして一揆にはありにひてハ
有馬にて出陣ある扨又出役元道を見たり申合せて
温泉山迄思ひ様子をうかゝひ見るに又馬場にて今も上陣
依て井村をもつて赤坂より直に長崎へゆくより
ハ長崎表吉利支丹不残して申付堅固に仕置申ゆへ
其上の余なり立花左近鍋嶋甲斐守を日を出り斗まて上陸

原之城一揆籠城之事

松倉領寺沢領の百姓ともと陽の城に吉利支丹集て
籠居し原の城を以て古城とし是に立て寛永十四
丁丑極月朔日より籠城して十日の内に出来る堅固に致し
城とす東南は二方は海岸屏風を立たるごとくにして
よるへき様もなし西北の岸高く其下は深田也一揆とも
先の籠城の内分ケしけるは本城には日の本の大将天艸四郎
時貞二の丸には芦塚忠右衛門上塚忠太夫渡戸作左衛門赤星主膳有
馬休意會津宗印同左京千利平太夫林六左衛門松竹
善右衛門三宅治右衛門久田土左衛門森村休澤前田忠兵衛上
拾人守人数二の丸には時貞同宗の森次兵衛大将上津浦大
蔵右衛門思ひ時貞山田右衛門作大浦四郎兵衛二千人

出丸を守る六輔の大将には有馬掃部蘆塚重政之
大将下津浦次郎兵衛満安葛諸蔵人正清千束善右衛門
作兵衛同三平戸塚相模なり寒なり二輔をかため
三の丸の輔大将には堂崎對馬次家大塚四郎兵衛是時會
右衛門正列大江源右衛門背津吉蒲有馬久右衛門若
とも三千余人なり扨又大江口をは柳山小瀬すこし宗
口の津上津浦式部ケむしは大矢野三左衛門と大
将として千三百余人にて守りけり池尻口をは安徳木場
の者とも六百余算村右京木場作右衛門を大将と
して堅め田尻口をは深江源右衛門余の案人を大将として
守る武者をは有江監物貞次入道して之休と
云ふ池田清左衛門光時松浦津村代右衛門

天草玄札以上五人也天草丸の大将ハ本戸但馬
安正足軽大将ハ上津浦主水種清芝田六左衛門次重
はかの者四千余人籠る役者ハ江はま次郎左衛門宗時
千々岩作太夫正時並に布津ノ兜本芝田六郎左衛門形
新定重五人之者請取なり濱田三吉石原友次郎
家定は四人鉄砲請取りて二六時中火消役をと
捌き本丸廻りの大矢を消す役也夜廻り当番門番
後安吉柄本左京時直入道を廻り洪水ハ晩りと
戒む鉄炮二千挺は惣大将柳瀬茂左衛門麻子木大島之助
時数隼人は三人ハ伝九老侍なり其奉行ハ小川右内
捨八楠浦孫左衛門本人之は外蜷川左京森川宗意形
是等ハ兆切りをたまし兼後谷人も内なり都合

其勢二万三千余り忍辱を以て籠城をなすよし女童子
万余惣人数三万余たてこもる浦度は小丸山を天草
丸と名付天草は若とも請ケれて防之天地四郎ハ肥後国
はなつもし昔より吉利支丹のまんはゐ所其の一味の
年やといへども宗門し奥義を究メ多謀人なれば
其日に隣国はんある吉利支丹を記集り籠城なし天草の
城を丈夫にせよとて近郷は立山浜辺は松木を切り
みて伐とり長サ一丈あまりにして城柵とし七八三尺
余りゆり立並いはならき七尺余りにしてひめへいは
大竹をとりて柵とせき捌り並べとしまして
あつき石火矢もとをるまじきやうに仕して城内ゟハ
本り堂を立ケ所様子をしてゆくまでの内は矢たつまじき役

不立物ゆきに布旗を五万六万ほとひしと一本つゝ立ときさ
しかしもクルストりふもしきの木を立二万ほとつゝ鉄炮狭間
を切らハ塀下より又塀を築越ん若あしも射てとゝせ
と下知あると塀下より旅中にて見え五間よ一本つゝてこられ
石大小百石とつゝ積たて四万五万より一本つゝ石ありさ
長刀或ハ鎗を手へ持ふしハ彫廻よりして一ヶ所つゝ休さ
二六时中代るかハ番ハ寄元より矢文ホ越して緩石
家様よるの仕置城内ハ少しも宛をたゝ枝ふしふ
皆婦ニ至り火縄もハ当二組つゝ城内を並積まうる
由ハ手ニ鉄炮玉もふてハ之も大ニ一度とふし寄元
ふも声ニ大ニありしは寄兵より矢文又ハ大矢を用
心目付横目ハ夫のとまりし朝夕昼夜二三度つゝ

大將四郎ホ廻り諸勢ふ諸家を進め或ハ籠城の面ゝふ
愛さしく候中付ろふ諸人四郎ふ於ても皆ゝ抛命て
一味して堅固ふ城を抱ふり古今まれふる事ふり

損目より城攻とふり

一 損目ホらよ鍋島家来と出役元ゟ数城浦尾ハ異と
ハ之候ハ天草九ホ浦とハふせ見とより兄中程を相
候ふたハツ三九ハ多く有馬勢立乞せい於金勢凱とあ
けハツ城中三ノ曲輪ハ多く付寄ハ於浦を鍋島より
よしハ人万三ノ曲輪の方まて凱をあけ寄ハあきさハり
事て後合さゝめ方のもしたりハ朝七ツ時ゟ鍋島元ホ
崎を築中と伝刻限よりの後陣石濱於ゝとの頭十人

もり討死せしハ是ハ南ハ流落中又小川あり
溺死又ハ不を越干潟ニて城よりハ雲ニ霄の抱人数ニて川
を越し塀下ニ臥居ハ甚だ列ハ干潟ニ而人数城へ集ル彼ル
為れ時ニ七ツ時ニ成立花より鬨をあけ中ハ南へ
溺傍勢南へ後より来ん事を思ふ又後より後詰の大
勢不続ハ手細ハ甚事彼川潟溺れてあけ守る中よれ
城中よりふし出るに先手の衆数多討死ニ成所に弱く川
城中ハ立花より三ノ曲輪ハ無く何ゆへと堀切衆より鉄炮
も敵城へ落る所味方の衆人ニ而多勢有之
其れ大将立花立庵甚介十時吉兵衛佐田源兵衛後へ
引ニ兼て後連友兵衛東田兵五郎岡田久左衛門小野織部
など以下物頭已上弐拾八人討死其外手負侍六十九人

雑兵討死其外三百八十人余と云々大友近も自身堀切
所へ被落候へとも内より鉄炮をはなしける故大友近の組頭
へ立あかりけるの所に中ハ放引とりけれ時ともに立花
上使之ふより松倉手へ及両度つかいもんそも立花
手へ後詰すべくかれ此ことのよしを松倉一手敵合中ハ
其の洞ハ立花殿を諸立花手柄とさせ置き申し由
其の儀にて大友へ中ハ御ん座中ハ面々陣所に帰参候と
までもたん衆時の時まで立花衆作役之嵐あたへ仕付
討死せしハ松平甚蔵弓矢の支配長谷川久三郎様衛て
手負中ハ御役者に候も松倉備へ手を立前にお諸ら
れの寄手大将衆人袖をそろへ法螺手を揃のみれに候
みえしひるみ何とも不叶矢文とも射させいたし

方便ならでは叶ふまじき故也と手引申さんと或者申す六八日未
て後日に於ては御申にて忠節仕寄に付るを能候よし也
悉く申さるべく候由申入候

一　今度吉利支丹徒黨為御誅伐嶋原表ニ被指向家
中之面々高人ニ候得ハ候間

一　高人無下知之儀堅停止之事　猥ニ先懸仕候者ハ可為
物頭可為越度事　附喧嘩口論并ニ堅停止　猥ニ籍候ハ之

一　徒黨似も御御人之所ニ候段物具侍し立不替旗
ことにても不撰具足ニ而討捨之事
　附　自然味方討於有之ハ急度可被申付事
右之條々可相守者也

十二月

一　今度御出陣嶋原吉利支丹徒黨為誅伐仰付之　板倉内膳正　石谷十蔵
各可被覚悟事

一　喧嘩口論堅可被停止事

一　猥ニ可剪捕竹木之事

一　宿賃并人馬之駄賃御定之通可取事

一　今度嶋原表遍高中人被致停止一切ニ以後可為
沙汰之事

右條々堅可相守者也　石谷十蔵　板倉内膳正

元日城攻并板倉内膳討死之事
　附　石谷十蔵手負之事

一武州江戸より罷来る松平伊豆守御調又御代官下
向ありより十来り松倉殿へ加せ付させられ其自内膳十蔵
惣手の者ども呼集め談合の時鍋島兵衆罷来る
内膳申されけるは此城落し可申と云間罷来る
申候ハ何れも時節を見合候老ども一命を捨申可
御攻め候へば申候ハ内膳討死腹立し云申ハ大勢討
死させ申ても此城を攻破り申時節ならで
ハめつたに寄り申ても其上にて諸人を殺申ものに
すてハ無之と被申けるハ兵衆を陣の者誠に
御やすみ候申候御せめ候て是ハ申ん左申ニ付候
共總攻寄申候而随ひ諸勢へ触らる
候し

一明七つ時分より人数出し石火矢をうち鉄炮をうち
為も時の声をあげ攻申候
一人数出す時陣中さハかしく無之様ニ堅く可申付る
一大将分歩行立たるへき事
一指物角紙旗相印たるへき事
一おさへさいはいを為申事
一夜より鉄炮打せ申間敷事
一小屋は火の用心小屋焼亡不仕様可申付る

極月晦日

石谷十蔵
板倉内膳正

右之通り軍法にて寛永十五戊寅正月元日寅刻ニ
諸手より鬨をあげ敵城塀際へ諸軍勢攻掛りけ
れ共城内より身を惜まず明松を投出し鉄炮石礫

亓

たゞ今は内藤所小隊まで御かゝる　相手の御旗本衆へ
書置の申され内藤之助殿十蔵へ申されけるは世の
て侍異加に候きてまゐるとさゝげられて村之丞を
殊にも異加の候き存る事もや候ん江戸まで八ツ朝
は候ましと御感被下候段と一つとりて殊にそれは
まで丈をさゝげられんこと本意なることにてこそ
さり　伊谷十蔵は浅黄四半に金の五つ紋をさしもの
まて内藤より申付て五六寸隔て塀下へ候き被申は
殊に敵十蔵の居りと扣打本丸の鑓を以て十蔵が
先より具足のかゝりの所と突いへは十蔵内藤浅
角をさしはさみの居りみて　振より　突落し申候あまり
城中より鉄炮をはなして打は中へ　突落さる敵の首を

取りもあへず　剣角をさしてと鉄炮をまて涼しと兵は五十日の
内陣居ても我等中にも諸勢とてみそふ候との趣申けると
とおふ渋狩中へ十蔵を塀下より　いのまそ土河に被追
は候たりより　鉄炮うちかけ候ふ不大形にもまた十蔵
退かり見ると　あると人ふ存なし　此時の追帰りは諸
まじきみふかり　能き者ともありて又足場悪き所へ追て者は
振あけて見へさし共おもしろき候ふとて追て共不
と振見てすみ見へ中にも細い先に追する共の釈を見て
後に追共は足場能き方へ追て取見る見へ中へ又相手異
ミえ候と右馬にもかくして十蔵　先へと放させては無念あり
塀外にゐる者　鉄炮にて足とも打れ不及力ち打返て脇中にて
随分一手は二ノ丸へ至ふ　扣りては　敵城内あつまり渡山成さり
ふ

此へハ矢鉄炮を打しきり射立打たて寄せ付山中に詰揺
喰候口迄入候けれハ足場あしく此を付寸候て旗ニ于
諸勢引出ニ付へ鍋島勢を引返し候得日向勝成ニ付死
し此立屯一ト手ハ濱手へ参りて立見合て居より是非なく
子細なる自大手ニ立屯一ト手ニて三好丸ニ繰込ミ候而
合後陣ニて押付立屯陣立にて元の塀裏一面満ち
本丸ニ押付石垣より立屯手へ役人共と申し御たて
引払て御構ひかと一揆共ニへ出石垣を被為成候て
鉄炮手へ落人ども打出ニぐる鉄砲首を拾ひ申しと
存候ものと思ひ申のよし被申候ニ付鍋島衆ニ討
立てて者共有馬左衛門佐并家来ニ討死侍九拾人手負
侍ニ七十五人 雑兵手負死人合千百余人ニ候得

家来侍ニ討死三百八拾三人 手負士百余人 雑兵手負
死人合二千五百余人 松倉家来ニ討死侍拾七人手負士
四十九人 雑兵合手負死人三百二十七人 松倉右近ニ討られ
浪人并死二十二人此外諸大名より上使ニ附られし役者侍三
拾余人討死手負五十余人其外ニ手負死人都合四千
余人と記録ニハ撫斬ニ手負死人五六十人有りて八百人よし
松平伊豆守役者小山田内記ゆ黒田監物作役者坪内兵衛
細川越中守役者 伴某十之丞 横山與一進 此外板倉
附られし者ハ其身も手負討死す 松平長門守役者西田
右之者とも此者共参りて縦横廻り立返して我国心得足
輕共とめしつゝ 塀下よりはりめぐらし撫斬ニ立返りて走りニ計て足
撫斬ニ候而手負死する人数有之候しと云へる由

ル揚利ニ而も遂ニ加味方ト者をつかハし其上被討案
否〻職手ニハ不入城をいふまゝもあるまゝ御定まわし
きて来る上ハ既ニ突入ハたのまゝ致ふ様ニ度死人大分在
之ニ付味方も甘も力及ひ難ハ[illegible]の黒田筑後ハ
細川唐津の寺沢抔ハ人数多く被討依て公方より江戸表の
御下代官松平伊豆守戸田左門を為九州へ向ハせ州
隣国より人数ありよ

一 松平伊豆守信綱戸田左門氏鉄其勢又千年ニて正月晦
日ニ到着陣趣[illegible]大方[illegible]ニ[illegible]
[illegible]寄せ城明兄[illegible]其外追て[illegible]の乱

一 細川越中守忠利 同肥後守光利 十五歳 二万三千五百人

一 鍋島信濃守勝茂 同甲斐守 同[illegible] 諫早 [illegible] 三万

五千人

一 松平右衛門佐忠之 黒田甲斐守 同市正 右京亮 八千人

一 寺澤兵庫頭堅高 七千五百七拾五人

一 有馬玄蕃頭豊氏 同左衛門佐 太郎 八千三百人

一 立花飛騨守宗茂 同左近忠茂 五千百五拾五人

一 有馬左衛門佐 同日向守 三千三百 余人

一 小笠原右近大夫 二千四百人

一 水野日向守勝成 同美作守勝俊 息伊織 十六歳 五千六
百余人

一 松倉長門守 五百余人

一 小笠原信濃守 二千五百人

一 松平丹後守 千五百人

一 原之城繪圖之事　附寄手陣所之事

従江戸御節ニ而上使并御使番衆或ハ御使役衆又ハ
御側近く被召仕候衆度々被差下候人数不被及候得
共 上意之由ニ而度々上使衆ニハ松平伊豆守
殿戸田左門殿酒井因幡守并井上筑後守帯刀之四郎
右衛門殿其外
大名衆為上使被参候哉味方之様子一揆方江其旨
武江被　仰上

繪圖并陣所之寫

右にして又鉄城ともに昼夜両城を攻しむ又大筒
小筒石火矢を惣よりうち掛夷ハ海よりハ黒田細川
舟押廻りて鉄炮をあまた放し又長さき
阿蘭陀船を艘日本船二艘にて海より石火矢
を打城内より謀を以あらんと欲人討てたとし
阿蘭陀左様に迷惑にて上使に申て長崎へ返す
唐山の文字を以書を作り人々をして御沙汰城代小笠原
を始め其外諸将丹後守を始め其外の諸家
諸浦の浦に仕置をさせ御帰陣の目出度
城内へ伊豆守より矢文を射かけれ双方より打合文言
はれかもしきとも子細之事申す以是後を
以て母妹又姉をもとし肥後守へ申せとかく承るへし

一首三十三　寺沢兵庫頭討取之
一首百六十九　鍋嶋信濃守討取之
一同十七　有馬玄蕃頭討取之
一同三　立花飛騨守討取之
合首数三百十
右之首嶋原口ニ大江浜ニ獄門ニ被掛置候
同時本丸ニ而手負死人
一手負百七拾人　松平右衛門佐家中
外ニ討死三十八人
一手負十壱人　黒田甲斐守家中
外ニ討死八人
一手負十人　同　市正家中
外ニ討死五人
一手負九人　寺沢兵庫頭家中
外ニ討死五人
手負百壱人　鍋嶋信濃守家中
外ニ討死三十三人
一手負五人　有馬玄蕃頭家中
外ニ討死二人
手負合二百四十二人
討死合九拾壱人
都合三百三十三人
右之外二月廿八日於城中手負死人并諸陣手小
其外数多嘩（サワキ）不大方ニ　細川家ハ仕寄場濱手之角ち

さい中ハ敵之手ニ合戦申ハ後陣ニ而先手ヲ請ル見
申ニ付形以手ニ逢申候由

島原始末記下

城衆評定并水野日向守金言之事

一寛永十五戊寅二月廿四日之早旦伊豆守信綱於陣所へ
諸大名小名不残被召寄惣衆於評合有之
戸田左門進み出申ハ様ハ江戸より之上使ニ
而城下人数不残様之術を以て追詰を見せとの
上意ニ候得ハ兵粮責ニ被仰付候得ハ宜可然城中も兵粮
尽し由聞申間御待可有之与申所ニ水野日向
守ハ元来老功の者ニ而加勢より誰ありて左様ニ可申
左様之儀を申候者伊豆守殿にて有之候ハ日向守も
如何思召候や伊豆守殿と日向守とも暮ヶ間ニ而御寛
下不申候迄とかくに様之の儀ニも思召を承度
兵粮攻ニ被成候事ハ各もと兵粮迄ニ而可然と思召候

思し右根浩ハ所に寄と　竟に申さるゝよし申
されとも戸田左門をもつて右のよし請合ぬれハ日向
守又申しハ左つ能と是ハおかるゝにと思ひ御
殿ハ左様ならは討取日向守申しは我を先に手細懸給
侍ハ御討せ被成れ此上ハ右根浩へ向てハいかよう〳〵刻
板倉内膳と討せは其外手に二無二切崩可被成よう
被下候様に御手儀ハいかやう可有之哉細川越中守鍋
島信濃守にも此は両人に候哉ハ御先手仕寄場を
ちらし拵候可仕也にみ仕寄を仕候て越中守
ハ三ノ曲輪信濃守ハ二ノ曲輪本丸迄と乗取申候
乗取勘定に仰せ候て可被下と申候は依て給
伊豆守殿へハ此を請合申されけれとも一旦も被成

其日向守立花飛騨守因幡守松平右衛門佐寺沢兵庫頭
其外は所の惣の野美濃守小笠原右近同信濃
守黒田甲斐守同市正其外有馬佐田大人松平丹波
松倉長門守一手の者不足につき有馬右近大夫
有馬して日向守申しハ二ノ曲輪
出丸又三ノ曲輪ハ不残して仕寄迄よりし其上
三ノ曲輪ハ人数ハ二ノ丸へ差寄候を相違と申候仕遣
仕寄一事仕寄候て不思議
仕寄も遠く見へは仕寄
有之人其御仰
勘定日向守先日向守
御検見以来小笠原

守なる者あなる黒川守なる磯野与総三村紀伊守
中山外記 鈴木孫右衛門 後藤主殿 小牧伊右衛門 武光右
衛門河村新八郎 中川志摩之助 旗奉行志田源兵衛 神谷
平七郎 可兵衛 近藤長兵衛 近藤弥次兵衛 大しまを
相手に取合ふ所に先を鍋島殿勝茂へ馬上にてあとく
乗込て二の丸へ打入れとも先手ハ鍋島紀伊殿勢ハ大勢にて
押込ける時ハ鍋島勢にて本丸までのり込れとも
くあるましくハ黒鍋島先手一戦仕と見合人数ひ
き時鍋島より我等共二の丸三の丸へ押入られ
本丸と目ざし一番に本丸を乗取事ハ本より時分
し人数ありけるとハ伊州ハ後にハ黒一番に下知
し給ふ見物なされ本丸をとりとりて付り

向守と堀の内へかゝる所を尤もおそれ入申候なにも
らぬ内に一番に付時とて候ふ所去様に目ざし
出るる我等にとても其人に候と見る侍ハ定まりくれ
何れとも御敵ありといふとも其時日向守子討死とお覚
え本丸とのりとりやさるる事をましく候老衆
討度まあらゆかれ又二十年三十年の間軍事
あるとも不知家康そ存じ候て申候は其之討
日向守ハ八十余及びまでに不労時あとへ入りかわり
時諸侍と小勝入ては申討死申候とは大しる
軍御内御議定まりし先旗馬印時奉行と時
雲より合い時子之刻より四つ時晩景より子六つ時
迄まて大雨降りおびたゞしく車軸とおびたゞし

事觸ニも不及強化大風ニ而城家へ延焼いたし候ニ付大
六日晩より天守際日和能候ニ付寄手伊豆
守備隊より鍋嶋ハ六日ニ城中へ乗込候明七日ニ
天下戸田左門殿ニ各諸将ニ取て一手ニ合へし
由申来る

二月廿七八日原之城落去す

一 各諸大名元二月廿七日頃戸田左門殿ニ相寄合
左ハ了城中之評定相究メ既ニ其日も已ニ割ニ而候
各退出し時諸家出立迄ていつも手勢を揃へ
ニ左門之本陣ニ至る物見ニ参候番所老中ニ
通りて申しけれハ鍋嶋より城ともの申しよりいかゞ
伊豆守ニ参与候所ハ是而しいかゞのやと承候ニ

いよいよ城中之由ニ候ハゝ伊豆守悦と大将として城乗
へ乗り出ると被思召けるや責手大将を上
乗込申し候各諸将ハ伊豆守を始鍋嶋より
不意ニ乗込候上ハ此勢ひのうへ夜中先陣後陣
ハ与まじきれのゝ其所々持寄へしと被申渡より
諸勢大将元始而有りきハ一日ニ乙乗りとも
馬と引よせ城中へ陣取ゝへ数と並て陣場々る
鍋嶋信濃守も急ニ乗込候事仕出し天正（ママ）
乗り直ニ本丸へ乗りけるに鍋嶋士卒向て乗とても
乃抜急ニ城中へ乗せとも急せ候而各諸将乗込ミて
乙け候ものゝ陣とも八ツ柵際まて人数を出し大
勢が城と相縁り兵粮丸八日頃まで續候出合

ふかり陣屋へ取られしが其へ備城とめるよし申
討みる及人数を打出し緒備仕事場まて結び
丸ゝ備て息差たる彼場とて打続き下知せしる信か
馬白川月毛に乗て従々方構付逸物なまゝしひ
一さん尓討手懸て陣場ふ乎懸る信か馬下見る
とひとしく惣備押寄らんとする所に武井東也河村
新八家老上田玄蕃ハ信か折を見て乎し治下知かく
して一人を竪りゆる手捨てしまへしとてさしも名
馬上にてぐるりと寄上帝と寄ていざ寄りゆる丹
持とめりお知しける其内我もりと存色しまり越
人数を押ふ場りまと家臣ハ信か乃馬先逃ゆ
とりつとも足場あしきゆへやうて馬よりおり立

刃鑓を杖に突き塀を乗越家武井日向守を追懸
御城と同じかけ続々といふ者追々進めと下知
せらる息伊織拾四歳又左衛門先に立自ら討取て
いまて甲斐守ふしとどとし決まる所へ総又四郎は
より見て傍に在りし右撲井文歩行侍に逢其成
とのとも追こみ来しかゝりて我お先じく右塚は後守に
寄せ家臣右信か父子へ寄ると其告 細谷井とも
いふ丸に於丸にて大将自身数人宿しに付これを見し外
是は其中を信か押通り南も不振本丸へ家臣の諸は出
丸を鍋谷へ寄出後入れまけ一入本丸を肝要と防戦
極いまて二三の内曲輪より本丸へ数不門取囲み信に仕
是み付本丸の大手口にて働きしなると申る者多き

に犯て義仲をにのぞみける程に彼佐嫡子義人斗りける
るを見し下知すと義人と大きに争ひけるに其子四郎ハ
由丸一もんめの證拠也但州ハ鍋冶か渡りて陣取りし
鍋冶一もんに家臣して寿丸より内へ入二の丸より
本丸の大手口に出で向ひけり鍋冶か太刀を打ちて入かけ
義人ハ寺澤が屋敷の後陣をなしとどめ寺沢が先にかけ
ぬけ侍一人鏡をかけて足にて二人天守丸の方へ打入て
本丸の内へ横ぎりのりかけ五間斗りまはりて石垣
とも一足まで家上りしに諸勢へ向ひて名乗りけり
さるハ此日の塚家大将に此旨ちかし一番のりなる
義人なりとぞいへる侍ハ能見てさりとてさらに急ぎ
家の者に犯て見佐と内鈴木をきのとなりの

石垣の上にて討取りし首と頭とをつけて十
文字の鏡と掲げり出て義人後と石垣より下りて
して押へて中にけるハ只今凌出来て一番家とハ申せ
ましいは本丸ハ我が日向一番家仕諸本馬下と
といれ家来ともに寄手を頼きれけるより我先出ハ
二番家と存じけれハ石垣より上り下りとも栄固の見れ
まそれける此時義人返してハいふやとあふぎ即時に
石垣より突落し一つ三郎も見頼みける間義人
頼めるハ佐が続ての此義人まで有ことどもなし
けるを附けしを悪しも鐘を此佐之美に頭きハ
諸大名し内なる誰みても武所好き清自分家筋二
帰家にて家来ともと清閑と続き義人ながら見させけり

大垣城へは同月上は籠人剛強の大将也行走り給
ひし丸にちらしのみ不審て渡辺すけ候者はいつまでも有
小さきはりの下にありしを美作守自身も搦曲輪にも
らへ不残落し旗本とも旗本衆弾合せし恐
馬印奉行近藤七兵衛前夜に籠る千財籠人の恩
けるは抑へは本丸は早渡我より先へ本丸へ入所に仍
候者自身最期の程は家より候也と此由大将にて給自
身本丸へ籠入るは我一身乗りと心得後とも此ゆへ籠人共も
御渡れよし申来るに付候者より火枝甚兵衛と申す者出
とまれき唯今此由のよし申所御後にて同久太郎
安藤氏其旗馬家にて置申所足軽共に鉄砲打せ
敵を押させ置申し其夜に入敵家にてあるらんと申しに同

上かう一面におつかみ候て渡せらるへし中合に下知て任せ由被
申され籠人返るに其は我よより渡し申さんとて申されは
相手方も敵ちらきあちこちにて口々に申す間所々に
籠もりしは夜に入敵家にて出るそてこそ其の所業
も各家候は不審甚敗は我手足にて致し上は成家をも
まかりしれといかにもかねさる一疋同也彼城の枝甚
たるつ大坂にても手合なれ共そ何とも乍れはたし疏
其の後に申ける候者其の様にて被申面々甚衛
まて置候へ参る暮にて候へ共紀丸より敵家にて出て
甚崩れ本丸は必定也し籠人足軽共に鉄砲にて
実もしつ其らは籠人ともに込て打討てと下知せられ
ける候者は麻机にかけて侍僮三十疋余り金銀物

志摩と相ふも顔々も有るとまうけ有ふ文様
辺土之事とも不所又人領の持番指揮ニ引りゟ来
て見て加勢し南部人ハ鉄楯と我手ニ立ち自身
鐘を打て懸れ略からさるま事つまり防き候へとも欲突
て物ともなく有りなり取不伊豆守とのゝ下知先細川ハ
手お後後陣の兵伊まゝとも引退候ふとも再ひ軍使立
ゝ付候伊豆守の文字ハ細川後陣ニ被引及兵ハ人又候
共候とゝ不陣构路より被来伊豆守下知も不聞入皆
懸らるゝといへとも願ニ伊豆守下知を受けて寺沢後陣へ
引取らるゝ処ハ伊豆守不相叶て将不思ふとゝ申し其外諸
大名衆ハ何迄も二ノ丸三ノ丸ニ陣ニかけ居候事ハ申し
ゟり

二月廿八日細川家之様一書ニ曰
一既ニ城落ニ及ふ一揆共ハ十日より手を離し粮尽き玉薬
を剰乏し依之皆不及是非候得ハ一揆共赤裸
合にて八寸ばかりの陣小屋ハ粮深山ニ見え振る其濃敷
有りとて移し活計尽き候の中を歩みいさ兵ハ先つ振りて
打出て手事を防ぐ捨て棄られ欲陳を構え立油断
て具足とめさ大将のある侍之所て攻めさせ
或ハ味方を打てさせ関東江戸衆皆日ましさいとせ
まやとも二月廿七日秋細川陣へ実て有る様子とも
ふさも深くハ先手之手人二手をして陣まで責め
大将本江衆方二十万として五万人也責め大将ゟ離れ
雅楽頭衆方も細川陣へ寄二ノ手切て有る様や候

然ハ我ニ自分再往と致事ニ度まて士卒と
不講案ニ無二臆病再往とふりて唯一度いさみ
之ふて即時ニ案込ふを見ふ又不能ニお疑ハ臆病
の語と申度と当緒者ハ臆病申様なれ不審
見て以ゆ惣て城なりとも申ハ諸手より案をて大ニ
諸手より攻懸る事と見合能時ニ責入て味方を
なりと取人々と踏付し責二責三ニのり以へも
願ニ案ニ致ける也然ハいかさ法者を進ませける
ちやきら能とて一手斗案ニけ以ハ城内より敵とも
先達て攻以方へ助ケ申さのみそれハ取はと存し以て
責理ハ不成物それハ惣の手大方案掛り城内拵よれ
手あり開度き時ニ見合責三ニかかり以ハ案破り以

さのみそれハ手取自分能時ニ申上と再三申上以へとも
御せきなされ相共申すとも得ず石衆のすて船ニ而
をかけ致度ニなとも大ニ討死以て無念存申
以へハ左馬助甲斐守帝なる家来に致臆病切共
今ニ不限らとハ申なる尤と感し忠之臆病を御嫌
物ニ而尊敬不斜
細川越中守一手衛

一 二月廿七日之刻鍋島勢ニ出丸ニノ丸へ案込ミ
三月細川一手も三曲輪乗時ニ案り破り海ニ乗方ニ歩
添て二ノ丸へ切り入り蓮池ノ左右浜ノ塀のきわして押寄
諸の塀なとの石垣ニひらけ乱を責懸ん塀中よりと
鉄炮石焼或ハ当午火を背大材木なとかけ或ハ

炭と薪入来て城ひらけ塀と寄る者とあるいは弓力或ハ
長刀鎗を以て寄手をきおとし種々防戦と
いへども細川家ともせし諸の丸へ先かけて一番
乗込む其外増田須多続て山本新九郎河喜多
九左衛門ありや其外川仁左衛門ら鉄炮を打放し歴々
打続て乗入る此時手負死人数多人あまされども
夜の暁乗酉刻に諸の丸東の端を焼しと乗破り城内に
九曜の星の旗を押立漸日暮に放火し柵木を結せ
詰けて夜を明し翌廿八日の四つ時に四の居館に打
入て火をかけ卯時城の主利天地四方の時負ヶ首を
陣野佐太夫討れたり細川の本丸一番に乗と八江戸へ註
進ありける

一 原城落去二月廿七日廿八日 手負死人

一 手負千八百二十六人
討死二百七人
細川越中守忠利

一 手負千六百三拾八人
討死二百十二人
黒田右衛門佐忠之

一 手負二百四拾五人
討死三十二人
黒田甲斐守

一 手負百五拾六人
討死拾六人
同 市正

一 手負六百八拾三人
討死百六拾人
鍋嶋信濃守勝茂

一 手負百八十五人
有馬玄蕃頭

一 討死七十八人
手負三百七十九人　立花飛騨守宗茂

一 討死百廿七人
手負九十七人　松倉長門守勝家

一 討死廿七人
手負百四拾八人　小笠原右近大夫

一 討死十九人
手負百弐拾人　松平丹後守

一 討死三十壱人
手負（?）　水野日向守

一 討死百六人
手負三百拾　寺沢兵庫頭

一 討死二十三人
手負三百八人　有馬左衛門佐直純

一 討死三拾九人
手負拾四人　戸田左門氏鉄

一 討死四人
手負百四人

一 討死六人　松平伊豆守信綱

都合七千八百九拾四人

内
手負六千七百四拾三人
討死千百五拾壱人

水野美作守と有馬左衛門佐直純諍論之事

一 水野美作守と有馬左衛門と本丸番乗此争ひ
城して後二月朔日ニ蔵人佐殿の陣屋へ参集ニ

られ以為家臣并るれハいかにとも為すべくもあるべき
會ス人ぶり皆驚目ハ鈴木重成悪黨人等聽送りて
為黨類ハ邪宗門の人々ぞ云云ふとなけらるゝを
常々ちんそうて重成悪人ぬすとまなと申し円孔文
まらみ計て通ニいかにと嫌疑ありし重成者の
とも為すいつまても悪人唯壱人もあるまじと其
為東悪人と奏せしハ其の後三月三日四日五日の中
在陣掛ひありて帰陣せしが原城攻とハ諸大名
原より人夫を出されて石垣を崩し破却なり夫より
をし温泉山に一揆ども隠れ居るやと陣手よりも
積敷も山を狩しまいらせども敵とて人とてもなし
原彼の大乱出しへむかしハ敵が出でるとて殊さらに
益く

落て或ハ生捕を検し殺せることもあり いつまでの足軽と
以下ハ分明ならずに被又原城へ紛れ討えし一揆の首
男女童ともに其方为三萬余人原城の前田の中にとりて
獄門にかけらる思ひ陣の柵木とハ殊先をかけて首を
突立ちならべこれハけに殿様事なりや
将原寄手の諸将帰陣せらる 附 松倉父子も
流罪す

一 古城は原の城落去の後破却し諸将三月中旬
にいづれも在所へ帰陣せらる 伊豆守信綱左門氏鉄ハ有馬
より天草渡へ渡海し夫より長崎へ城の仕置等ありて
中付陸路肥前の多良国をへて唐津筑前福岡の城を見
為幸順見し豊前の小倉へ帰着それより江戸より

一三十六間　有馬玄蕃頭
一百四拾六間　松倉長門守
　後ニ御鳩ニ仕寄横間数
一九拾弐間　細川越中守
一拾九間　立花左近
一七間半　松倉長門守
一三拾九間　有馬玄蕃以
一四拾間　鍋島信濃守
一弐百間　黒田右衛門佐
　内弐拾間余寺澤兵庫以請先ハ天草より
　遅来故

旗馬印之覧
一板倉内膳正馬印　白き結切之紙半月家之紋　池田
　新左衛門
一板倉主水正馬印　赤き瓢箪上ニ小熊付て
一石谷十蔵　指物浅黄四半ニ金ニて五ノ字
一松平伊豆守　旗地白紋ハ黒くして　袖てつきより
　同馬印　吹貫ニとり　紙ハエツル大馬印　白き吹貫紋ハ黒く
　と同前　和田理兵衛　小澤小兵衛　仁右衛門　篠田　九太夫　石
　川作左衛門
一松平甲斐守　馬印二段ニ白熊
一戸田左門　旗地白紋赤き丸二ツ並　日の字書き之地
　地黒白之地　苗字白　半月　永井大膳　今右衛門　戸田治右衛門

一 戸田采女正 家中 菅笠三階

一 同三男 家中 三階笠白熊

一 細川越中守 旗地白ク上ニ紺の九曜下ニ紺より紋有
し 家中八猩々皮也鍬形下ニ金紙也切サキ 付て家
中番さし物紺二本ヒナイ 紋有 金にて上ニ九曜下ニ如く
九まて 使番さし物赤き麾 指物黄もあり

一 同丹後守 家中 黒白段々の八ヒレ

一 黒田右衛門佐 旗中白ク上下紺ニして中ニ紺々のとん
馬印八ツ手 [illegible] 切さきに猩々皮 使番さし物八白き四半ヒナイ
鍬形也 出し 爵毛

一 鍋島信濃守 旗上白下黒 筋違ニ 深紅ニ染り 紺々ニ紋有
之 馬印八 大白熊

一 同甲斐守 家中 鳥毛ノさやうか

一 [illegible]番頭旗上白下黒白きニ黒き針貫
家中十文字 鑓ニ鳥毛付て さし物銀也天目

一 有馬玄蕃 家中 白き鳥毛也 二ツダンゴ

一 立花左近 旗上白下黒きニ白き段々也 紋有之 家中
七ゲノ 二ツダンゴ 大家中 旗同前 深紅ニ染 下ニ金箔イラ
タカ珠数付て 使番 [illegible] 三本ヒナイ
出し 猩々皮也

一 小笠原右近大夫 旗赤く紋白き三階菱 指物赤
き四半ニ紋右同前

一 寺沢志摩守 旗地白ク黒ク餅ニ付 馬印黒き熊 二段ノダンゴ
下ニ金紙切サキノダンゴ二ツ 大馬印 白紙 四半ニ黒餅

一 蒲生指物白き二本シナイ黒餅

一 井上筑後守指物地赤く黒キ丸ノ字

一 日根野織部指物地赤く金の丸の内た二

一 榊原飛驒守指物白き四半ニ赤キ五

一 丹羽指物赤キ四半白き餅

一 堀指ものたるをしでの赤き四半白き五

一 松平吉之丞さし物赤き上鳥毛付て

一 松平修理指物銀の山いろはにほへと

一 永井日向守立物黒き毛かぶと笠二階旗黒地ニ白き
永井

一 板倉長門守旗地黒ニ上ノ方ニ赤き筋横ニ二筋
中指ものかし猩々皮羽織

京ノ塚より矢文之字

今度不慮ニ及籠城某国家と云々様可為思
召候歟然ニ至テ儀ハ吉利支丹之宗旨ニ如此存知
我宗之秘事ニ不聞事ニ候得共籠城天下様数ケ
度法度ニ出ニ候度々迷惑仕就中後生之大事
難遁存知不易宗旨色々之御乱明剰外人
有之候法式況融穿撫窘迫致後来為て帝出
貴殺某志以共惜命身之為何責以致抑
征淚数度修候之政宗国以絶此度不思儀之
天意難計然極今ハ成立以少し国家乗事之以
私欲從無事之我計中右大之事法度不相
替様之様之法乱明雖後之又延弱之之為以為